

NJ 素流協 News

令和4年5月10日
第208号

令和4年5月10日発行・発行所 ノースジャパン素材流通協同組合 〒020-0024 盛岡市菜園1丁目3-6 (農林会館5階)
TEL 019(652)7227 / FAX 019(654)8533 / <http://www.soryukyo.or.jp/index.html>

ノースジャパン素流協 令和3年度 第2回林業講演会

「木材流通の現状と集成材における 国産材利用の展望について」後編

3月15日に開催した林業講演会について、今月号はパネルディスカッションの内容をご紹介します。

【パネルディスカッション】

NJ素流協 鈴木理事長(以下、鈴木)：今回のウッドショックで一番影響が大きかったのは、国産材比率がほとんどないと言われる小断面、中断面の集成材分野だったと思う。最初に澤田社長に伺いたいが、現在の工場の集成材主力製品に対して、今回ウッドショックを受けて何か新しい注文等の動きはあるか？

有限会社川井林業株式会社ウツティ かわい 澤田代表取締役社長(以下、澤田)：現在の当社の樹種はスギ、カラマツ、アカマツの3種類、用途は、スギはほとんど柱、母屋、一部小屋梁、カラマツは梁桁、土台が大半。ここ2、3年の取組みとしては、アカマツに挑戦しており、土台や大引

をわずかだが生産している。生産割合はスギが7割、カラマツとアカマツで3割となっている。昔は広葉樹をやっていたが、針葉樹の建築材の

業界に入り、今回はウッドショックの影響もあった。今回、針葉樹の集成材をやっている気付いたことは、柱と平角の受注が増えたことだ。今まで外材にシエアを取られていたのを、いくらからでも多くしたいと思っている。

鈴木：日當さんに伺いたい。経営されているプレカット工場で今扱っている部材はどういう種類で、ウッドショックの絡みで何か変化があったか？

久慈プレカット事業協同組合 日當専務理事(以下、日當)：プレカット工場が使っている材とは、工場が希望する品質を備えていることが前提で、品質が確保される条件で、次に使え

る樹種が決まってくる。ただしプレカットが90%のシエアを占めるので、世の中全体の使用樹種ということに置きかえてもよいことになる。柱は国産材ではスギ、ヒノキが多い。当社は岩手県北にあり、外材のスプ

ルースを使っていた時期もある。集成材では、スギがほぼ8割、あとはカラマツ、ヒノキで対応している。特殊な注文では、ホワイトウッド、レッドウッドの集成材や米ヒバを使用するものもある。また特殊なルートで米マツを使ったこともある。梁では無垢を使うことはなく、集成材が多く、カラマツが圧倒的に多い。スギ集成材は使い切れていない。国産材、外材というくりでは、まだ圧倒的に外材が多く、レッドウッドの集成材を使うケースが多い。また、外材、国産材というより、複合材と呼ぶべきかもしれないが、スギと米マツを用いたハイブリッドの集成材も市場には出ている。これは希望する樹種の集成材が手に入らず、やむを得ずということで使用している。桁はほとんどが母屋角だが、スギ無

垢材を使うことが多い。集成材ではカラマツ、スギを使う。外材はホワイトウッド、レッドウッドが多い。当社の商圏は北東北3県なので、東北全体や全国を網羅したものではありません。ということでご理解いただきたい。

鈴木・今集成材の場合は圧倒的にホワイトウッド、レッドウッド、米マツとスギのハイブリッドが多いが、



協和木材流通組合 理事 鈴木信哉

これが国産材の集成材に代わらない理由は、価格なのか、それとも品質・性能を重視しているからなのか、順に聞きたい。

協和木材株式会社 佐川代表取締役以下、佐川）・戦後植林したスギが成長して、輸入材がゼロでも十分国内の

材だけでまかなえる位の蓄積があるが、ハウスメーカーやプレカット工場の、強度、ヤング係数が低い点だ。ヤングと強度を混同している部分があるが、ヤングは曲がりやすさであり、強度は破壊されにくさである。スギの場合、かなり大きく曲がっても壊れないが、曲がりやすいという欠点を持っている。輸入材は逆に、破壊強度はそれほど高くない。ヤング係数は非常に高い。米マツで言うと、米マツのE110はスギのE70とほぼ同等の破壊強度しか持っていない。スギの曲がりやすさは、欠点でもあり、長所でもあるが、横架材として使われる場合には欠点として見なされやすい。スギを売り込みに行った時に、長年真っ白な輸入材を使い続けていて、スギの赤身と白太が混ざっていることに違和感を持つ人がいること、またスギの場合には死に節、抜け節がどうしてもあるので、これらは強度に全く影響がなく、壁の中に入ってしまうのに、それでもやはり見映えということを言



協和木材株式会社 代表取締役 佐川広興

われる。なぜ問題にされるのか分からないが、非常に厳しく言われるので、壁の中に入ってしまう柱を、パテで節をきれいに修正して納入している。集成材工場が一番人手がかかっているのがその部分だ。他は自動化できるが、死に節・抜け節をどの程度補修するかを判断して、パテで埋め、サンダー、カンナで仕上げ、というのが製造工程の中で一番コストのかかる部分だ。ハウスメーカーが、構造材には強度があれば良いということと、建前でお施主を案内する時に見映えが悪いと困るといっていると一緒に考えなくてはならないのは問題だと思う。消費者の考え方も変

えなければ、スギの利用はなかなか進まないだろう。

鈴木・フェイスとバックに死に節が見えると言うのであれば、合板のように、元玉のA材だけフェイスとバックに使うというようなことはできないか？

佐川・今4プライで作っているが、フェイス、バックが2枚、中に入れているのが2枚になってしまつて（笑）。見映えのいいものをフェイスとバックには使っているが、中に比べて強度も高いものを使うので、それを考えるとなかなか難しい。

鈴木・澤田社長に、同じく外材の評価が高いのは価格なのか、性能なのか伺いたい。誰がそういうことを主張しているのか？ハウスメーカーかプレカット工場か？

澤田・正直、木材には罪はないし、ハウスメーカーかプレカット工場かというのも、好き嫌いもある。佐川社長がおっしゃるとおり、外材と国産材では見た目の差はある。ただウッドショック前は、見た目、強度もだが、外材が安く入り過ぎたというこ



有限会社川井林業・株式会社ウッティかわい
澤田 令 代表取締役社長

ともあると思う。米マツもそうだが、「よくこんな値段で入るな」というような立派なものが入ってきていた。山の人がどんなに経費を節減したらこんなものが入るのだろう、なぜ外材はこんなに安いのだろう、という素朴な疑問が20年も前からあった。柱がホワイトウッドに代わった時も、梁桁のレッドウッドや米マツもそうだ。しかも長い間、大量に安定的に入ってきた。そうなるとハウスメーカーや工務店にとっては、ホームセンターでもどこでもどこかへ行けば何とかなるというのが定着してきたのがこの10年20年だったと思う。それが、木造住宅に占める外材の割合

が6割7割になった決め手ではないかと思う。あとはお話にあったように、見た目。米マツ、ホワイト、レッドにはとび腐れも抜け節もない。そういう意味ではヒノキに似ているが、見た目の良いものが安価に大量に入ってきて、ハウスメーカーの目がそちらに向いたということがそもそもだと思う。

ただし、ウッドショック後のことは今後の課題だ。見た目より本物で勝負する時代に入ったのではないかと思う。

鈴木：日當さんに伺うが、そもそも部材を決める時はプレカット工場が決めるのか、発注者がこれにしてくれと言うのか、どちらだろうか？

日當：ウッドショック前では、無垢か集成材かということで仕様を決められることはあったが、特に集成材では樹種の表記はなかったと思う。北東北の商圏では、集成材イコールほぼホワイトウッドの管柱という時代が長らくあり、その中で、岩手県内では澤田社長さんなどが集成材を始めて、国産・県産材の集成材が商

品展開されるようになった。選択肢が出てきたということで、プレカット工場としては商品提案できるようになった。工場に届く圧倒的多数の一般住宅の仕様書では、無垢の場合にはスギと書かれることが多いが、集成材の場合は樹種まで細かく書かれることは少ない。では誰が決めるかというと、プレカット工場なり、工場に材料を納品する木材屋が決めるケースが多いと思う。その中でどの商品を提案するかとなると、価格競争が厳しかったこともあり、どれが価格的に優位かをにらみつつ、集成材であれば品質はほぼイコールだという前提のもとで、次に考えるの



久慈プレカット事業協同組合
日當 和 専務理事

は入手のしやすさとなる。プレカット工場も大量の在庫を抱えることができないので、ジャストオンで納品できる商品として、外材を選ぶことが多かった。ただ県内で国産・県産材、特にスギの集成材が出てきて県内の供給力が増し、輸入材と伍して並べられる魅力を増してきた。価格競争力ということでは、大変な努力を重ねてほぼ互角の商品を供給していただき、私達使用する側としては、国産材を勧める幅が広がってきたと考えている。

鈴木：今のお話で、品質と価格の問題が一番のポイントだと思うが、次の課題として、やはりJAS規格をきちんとしてもらった方がいいのか。加えて、設計者や住宅メーカー等に、スギでも大丈夫なところはあろうという情報共有をやった方がよいといった提案はあるか？

佐川：国産材を使ってもらうためにどこに訴えかければいいのかという点だと思うが、ハウスメーカーが部材を決める上で一番心配するのは、いかにクレームを減らすかというこ

は入手のしやすさとなる。プレカット工場も大量の在庫を抱えることができないので、ジャストオンで納品できる商品として、外材を選ぶことが多かった。ただ県内で国産・県産材、特にスギの集成材が出てきて県内の供給力が増し、輸入材と伍して並べられる魅力を増してきた。価格競争力ということでは、大変な努力を重ねてほぼ互角の商品を供給していただき、私達使用する側としては、国産材を勧める幅が広がってきたと考えている。

鈴木：今のお話で、品質と価格の問題が一番のポイントだと思うが、次の課題として、やはりJAS規格をきちんとしてもらった方がいいのか。加えて、設計者や住宅メーカー等に、スギでも大丈夫なところはあろうという情報共有をやった方がよいといった提案はあるか？

佐川：国産材を使ってもらうためにどこに訴えかければいいのかという点だと思うが、ハウスメーカーが部材を決める上で一番心配するのは、いかにクレームを減らすかというこ

とだ。大手のハウスメーカーならばどこもクレーム対策室があり、そこでの対応によってハウスメーカーの信頼度が決まり、また費用もかかる部分だ。日本の消費者が細かい点までこだわること、これが壁の中の管

柱までパテで補修をすることになる原因だ。さらに、木材が使われない典型的な例が内装材だ。この会場も壁に木材がたくさん使われているように見えても、これは木材の年輪が印刷されたものであって、木材ではない。以前は突板（つきいた）もかなり使われたが、突板すら欠点が目立ちやすいということで、フロア材

に使うことも減り、ほとんどがプラスチックや塩ビ類に印刷をして木に見せかけたものに代わってしまった。消費者が同じ建売住宅を買って、隣の家と自分の家とで年輪や節の大きさが違う、というような点は許容範囲をもう少し考えてくれないと、国産材、木材の利用は進まないと思う。基本的に、何も無垢で使える木材を挽き割って糊付けして集成材にする必要はないし、無垢の内装材を、粉々

に砕いた木を固めてその上に塩ビシートを貼る必要もないと考えている。その辺がやはり、消費者の認識の違いなのかなと感じている。

鈴木・消費者の教育の視点も必要だということだと思う。澤田社長に伺いたい。住宅メーカーへのクレームというお話があったが、逆に、住宅メーカーの方で国産材を使うことを売込みの材料にするような動きはないのだろうか？ 外材ではなく、国産材をやりたいという動きは？

澤田・間違いなく、ウッドショックで外材より国産材で代替品を探しているし、その要望はある。強度、ヤング、見た目など、一気にはできないが、国産材で代用できて一定の量を安定して入れてもらえるのであれば、色々なハウスメーカーから国産材を増やしてもらえないかという要望はある。JASの問題など整合性を打合せし、柱はもちろん、梁桁も大丈夫だというようなことを、設計事務所がもっと勉強してほしいと思う。ハウスメーカーの設計部隊と、地方であればユーザーよりも、設計

事務所が内部構造についてもっと勉強して、外材でなくても、国産材でも行けるということを啓蒙してほしい。

鈴木・設計事務所の件では、大学の建築学科に木造を教える先生がいなから教育ができないと堂々と言う教授がたくさんいて、では他の大学の学生に木造教育をできる先生を講師にしてサマーセミナーで単位をあげたらと提案したのだが、どこの大学が主流になるかどううまくいかず、話が流れてしまった。その辺もこれからもっと働きかけが必要かなと思っている。日當さんは木青連の会長もご経験されたが、「外材でなくても国産材でも性能が担保されて使えますよ」というような全国的な働きかけはできないものだろうか？

日當・平成17年に林野庁の「木づかい運動」が始まり、日本木材青壮年団体連合会も一翼を担えとのことで企画した。木材にあまり興味を持たなかった一般の消費者に対して、性能を前面に出して国産材の優秀性をうたうアプローチもあるが、日本の

木を日本で使うことの良さ、環境にいいことだというアプローチもあつてしかるべきだと思い、まさに京都議定書がスタートして、環境への貢献に資するというところで、当時若手であったが取り組んだ記憶がある。

澤田社長のところでカラマツ集成材をつくった時には、これを売ってくださるようにとのお題をいただき、当時輸入材の集成材が全盛だった時に最前線で工務店に提案をした。馴染みのない樹種の集成材を販売しようとする時に、価格や性能ではなかなか響かないと思い、工務店やハウスメーカーが、彼らのお客であるお施主に説明するネタとして、木づかい運動で推奨された国産材を使うことのメリットや価値をプレゼンし、「このよくな言い方をすれば一般のお施主の心を打ちますよ」というような話をし、スギやカラマツの集成材を売り込んだことを思い出した。そういうことが今でも必要なのだと思う。狭い範囲ではなく、日本の木を日本で、日本の技術で使う、ということをしよく伝えれば、性能はほぼ同じレベ

ルに来ていと思うので、正しい消費、選択だというところに落とし込んでいけば国産材化がもっと進むのではないかと思う。

鈴木・製材工場をやりながらプレカットをやり、住宅建設もやるような若手が結構いるので、その人たちが外材を使わないように教育をお願いしたいと思う。

日當・その意味では、木づかい運動のその先は実は一般消費者ではなく、私達の同業者だ(笑)。同業者が正しい選択をすることが大事。

鈴木・このようなウッドショックで国産材利用への要望があった時、需要が急変した時に、川上の素材業者への要望は何かあるだろうか？2×4用の丸太の採材というようなお話でもいいので。

佐川・私達は素材生産もしているが、ウッドショックで困った点は、素材生産業者が請負仕事より自分の山の木を伐って出した方が儲かると思っ

時に出材量が減ってしまった苦い経験がある。やはり素材生産の中で、

注文にいち早く応えられるところが次の注文をもらえる。丸太の採材について、色々な採材が山土場でき

きて、いち早く工場へ届けられる体制があると、注文を取れる機会が増える。できることなら素材生産班を持つている人は現場の状況をよく把握し、夕方の製材側からの注文に「明日にでも玉切りして届けられます」というような体制ができればと。これは国内の生産者でなければできない相談なので、注文を逃さないためにも、採材長さの変更ができる体制を是非お願いしたいと思う。

鈴木・今日言っ

て明日届けますという時には特別な単価でお願いしますというのが、素材生産者の希望だと思うので、是非(笑)。

澤田・はつきりと山の方たちにも現状を知ってほしいのは、日本の木材業界に占める外材の割合は半分以上だということ、一番大事なのは、木材価格が高い安いということは、これは国産材では決められないとい

うことだ。不思議なことだが、ほとんど外材がプライスリーダーになっている。ではなぜ日本の木材業界が価格や色々な面でリーダーになれないか。シェアが半分以上、55%、60%以上になれば、価格よりも安定供給で、日本人が日本の丸太の値段を決められるようになる。量的に安定すること、「伐ったら植えてまた供給するから、その代わり値段が高い安いとかでなく続けて買ってもらいますよ」というようなことを何か構築しないと。日本の木材業界としてのそうした仕組みづくりをお願いしたいと思う。

鈴木・日本の木材自給率が40%台と

いうのは、実はパルプチップを入れて

いるために低く見られている。製材用材だけなら50%は超える状況になつてきているので、この表現を変えないと、日本の主導権は永遠に獲得できないことになってしまうので、この点は私も反省するところだ。

日當・自分たちプレカット工場の川上は製材、集成材工場なので、まずそちらへの安定的な供給をしていた

だきたい。それが十分に行われたあかつきには、県内への国産集成材製品の安定供給を是非お願いしたい。

鈴木・最後に今後のお三方の国産材集成材を中心とした取組みと展望をお聞きしたい。

佐川・今回のウッドショックでホワイトウッドの管柱とスギの管柱の競争になった中で、明らかにスギの方が価格的にも優位性がある。後は、私達がスギの管柱を最大限売り込む努力をするのと同時に、ホワイトウッドと価格が同じになった時に、ハウスメーカーに国産を使ってもらえるよう今後PRしていこうと思っ

ている。

澤田・国産材の時代が今来て、今後ともこの形が続くように願いを込めて、ハウスメーカーや大工さんも含め、国産材を愛する人に1㎡でも多く生産して供給したい。自分は昔は広葉樹ばかりやっていたが、針葉樹にもどちらにもいいところがある。

そのいい点を活かしながら、国産材を樹種を問わず使うような仕組みづくりを今後とも考えながらトライし



ディスカッションの様子

たいと思う。
日嘗・ウッドショックを一年経験し、価格的にはほぼ同じようなレベルに來たと思う。品質的には国内の集成材工場の技術力の向上には目をみはるものがある。加工するサイドとして、国産の集成材を使用することに何らためらいはない。樹種を選択する時に、入手のしやすさということをお話ししたが、ウッドショックで国産材の優位性が如実に出た。直接のお客である工務店、その先のお施主に、社会的に正しい消費行動を一緒になってお伝えする取組みが必要

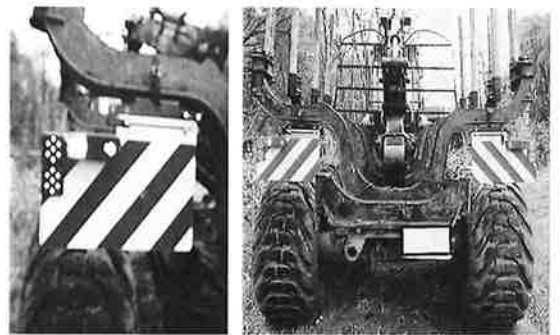
だと思う。先ほど鈴木理事長からは業界、若手教育に取り組むようにとの叱咤激励があったので、この点についてこれからも業界の一員として取り組んでいきたい。
鈴木・阪神淡路大震災を契機として急激に進んだ外材集成材だが、今またここが転換期だと思っているので、皆様と一緒に頑張っていきたい。川上側も、川中の方に安定して木材を供給できることをお誓いして、本日のパネルディスカッションを終了したいと思う。ありがとうございます。

トピックス

ホイール型林業機械及び大型の林業機械の走行・輸送に係る手続きについて

●ホイール型林業機械の公道走行に係る手続きについて

①道路運送車両の保安基準に適合していることが必要です。



保安部品装着例

②特殊自動車のナンバー取得が必要になります。長さ4・70m以下×幅1・70m以下×高さ2・80m以下、そのうち最高速度が15km/h以下の林業機械の申請窓口は市区町村になります。なお、走行するには小型特殊自動車免許の取得が必要です。

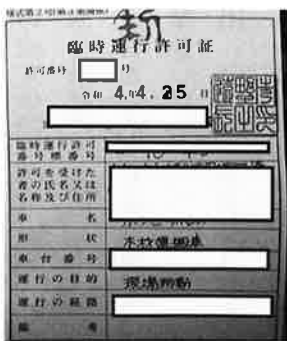
③②の長さ・幅等の基準値を超える林業機械の場合は、管轄の運輸支局に大型特殊自動車の申請・登録(ナンバー取得)、また、保安基準緩和の申請を行う必要があります。長大な長さ・幅等の構造による使用態様が特殊であることから、安全・環境上支障がないものとして、地方運輸局

長から保安基準の一部を適用しないことの認定を受けることで、公道を走行することが可能となる場合があります。また、大型林業機械を走行するには、大型特殊自動車免許の取得が必要となります。

●大型林業機械の走行・輸送に係る手続きについて

①特殊車両運行許可…一般的制限値(最高限度)・長さ12・0m×幅2・5m×高さ3・8m等(一部抜粋)を一つでも超える林業機械が公道を走行する場合には、道路管理者に特殊車両運行許可を申請し通行許可を得る必要があります。

・道路管理者(国道↓地方整備局、都道府県道↓各都道府県、市町村道↓各市町村)



運行許可証

②制限外積載許可…貨物を積載して車両を運転する際に、当該貨物が

分割できないものであるため、積載物の重量、大きさや積載の方法が、冒頭の「積載重量等改正(①②③)」の基準を超える場合は、出発地の管轄する警察署長に制限外積載許可の申請を行って、許可を得る必要があります。

●輸送に関する積載重量等制限が改正されました

令和4年5月13日より次の通り改正されました。()は改正前。

①「積載物の長さ」車体の長さの1・2倍(1・1倍まで)を超えないこと。

②「積載物の幅」車体の幅の1・2倍(自動車の幅まで)を超えないこと。

③「積載方法」車体の左右は車体の幅の10分の1(車体の幅まで)を超えてはみ出さないこと。

※積載物の高さ、重量、車両の前後の長さについては変更ありません。

保安基準や、申請に関する必要書類、申請方法については、林野庁のホームページに掲載されています。ご確認ください。

林野庁ホームページ
<https://www.rinya.maff.go.jp/j/kaihatu/kikai/wheel.html>



南会津サミットで鈴木理事長が講演

4月12日、南会津林業成長産業化推進会議と南会津町主催のサミット「2022 東北地方林業成長産業化地域サミットin南会津」が開催され、当組合鈴木理事長が「林業・木材産業を取り巻く最近の情勢及び今後の展望」と題し、講演を行いました。

お知らせ

松くい虫被害木等の利用駆除ガイドラインの変更について

岩手県松くい虫被害木等の利用駆除

除ガイドラインに一部変更がありましたので、前号に追加してお知らせします。

変更のポイントは、松くい虫被害木と健全木の判断が難しいことから、松くい虫被害地域における補助事業等松くい虫駆除を目的とした事業による伐採木をすべて「被害木」と位置付けたところです。ただし、この「被害木」に含まれるアカマツ健全木の利用については、新たな駆除方法として人工乾燥機による熱処理を加えて、製材利用を可能にしています。

これにより、松くい虫の「被害木」を岩手県松くい虫被害木破砕等処理工場において、チップ、合板用単板及び製材に利用できるルールに変更されています。

また、これまでの岩手県松くい虫被害木破砕処理認定工場(通称・認定工場)を岩手県松くい虫被害木破砕等処理工場(以下「処理工場」という)に名称変更しています。現在の処理工場は、紫波町1、花巻市1、北上市2、一関市3、計7工場となつ

ています。

なお、松くい虫が付着している伐採木の移動については、原則として松くい虫(マツノマダラカミキリ等の媒介昆虫)の駆除後でなければ移動できませんが、松くい虫被害地域内(未被害地域を経由せずに)の移動は可能です。

伐採等の時期は、従来のとおり10月〜翌5月とし、6月20日までに駆除処理を行う必要があります。

東北森林管理局の広報誌「みどりの東北」スマートフォン版がスタート

これまでのPC版に加えて4月よりスマートフォンでも「みどりの東北」が見られるようになりました。

東北森林管理局ホームページ
https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/koho/koho_si/midorisumaho_202204.html



4月号は、低コスト造林、森林譲与税の活用を特集、地方発Newsでは、地域を守る治山施設、ドラゴンアイ、蔵王の雪の回廊などを紹介、その他4〜5月に行われる東北各地のイベント情報など満載です。

NJ素流協 第19回通常総会の開催 について

本年度の当組合の第19回通常総会を次のとおり開催します。

なお、詳細につきましては別途ご案内いたします。

【日時】 令和4年5月23日(月)
15時00分〜17時15分

【場所】 ホテルメトロポリタン
盛岡ニューウイング

木づかい運動『ウッド・チェンジ』のご紹介

NJ素流協では、国産木材利用促進のため、事務所内造作等の木づかい運動『ウッド・チェンジ』に取り組んでいます。

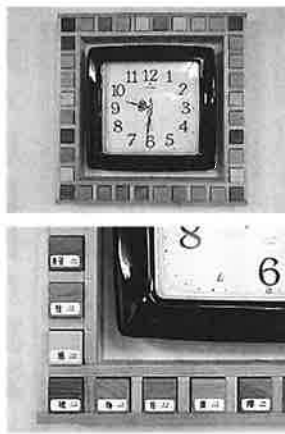
この度、新たに国産木材を使用し

た備品を導入しましたのでご紹介いたします。デザインと製作は全て当組合員の株式会社小友木材店様です。

◎応接室用時計フレーム

この時計のフレームは、国産木材36樹種の「木のかげら」をはじめんだフレームになっており、一つ一つ取り外すことができます。

事務所の応接室に設置しておりますので、お立ち寄りの際はぜひご覧ください。



◎木製ネームプレート

会議等で使用する卓上ネームプレートをウッド・チェンジしました。5月23日の通常総会の会場でも使用しますのぜひご覧ください。

なお、ネームプレートについては組合員の皆様にも貸出を行いますのでぜひご利用ください。お問い合わせは経営企画管理部まで。



◎木製ネームホルダー

職員用ネームホルダーをウッド・チェンジしました。お会いした際はご注意ください。



青年部会第4回通常 総会の開催について

NJ素流協青年部会の第4回通常総会を次のとおり開催します。

なお、詳細につきましては別途ご案内いたします。

【開催日】 令和4年6月11日(土)

【場所】 コミュニケーションギャラリーLiRiO(盛岡市)

青年部会「第2回げんき 森林(モリ)モリフェステ イバル」を開催します!

ノースジャパン素材流通協同組合青年部会は、昨年に引き続き、いわての森林づくり県民税を活用した児童・生徒向けの森林・林業普及啓発イベント「第2回げんき森林(モリ)モリフェステイバル」を開催します。

当日は、ハーベスタ等の高性能林業機械による作業実演、木のぼりや丸太切り等の体験、林業機械メーカー等による展示等、森林や木、山のごとについて知ってもらうための企画を用意して皆様のご来場をお待ちしております。

なお、イベントの詳細についてはNJ素流協ホームページに掲載いたします。

【日時】 令和4年7月9日(土)

10時00分〜15時30分

【会場】 岩手県民の森(八幡平市)

【併催イベント】

- ①第73回全国植樹祭1年前プレイベント（岩手県、第73回全国植樹祭岩手県実行委員会）
- ②チェーンソー伐倒実演（岩手県グリーンマイスター連絡協議会）
- ③木工教室（岩手県木材青壮年協議会）

新職員紹介

4月1日付新任

経営企画管理部経営管理課

福田 菜己（かんな）

経営管理課 経理・財務担当として勤務することになりました。岩手県紫波町出身です。初めての経験で分からないことだらけですが勉強しながら元気に頑張ります！皆様よろしくお願ひいたします。

肝心かなめの免税軽油

ある日のこと、

A「機械を動かすのも燃料代がかかって困ったものだ。そういえば、この間、近所の同業者が免税軽油を使うと得だって言っていたけど、免税軽油って知ってる？」

B「免税軽油っていうのは、軽油価格のうち軽油引取税が免除された軽油のことらしい。農業をやっている仲間も使っているって言ってたな。」

A「免除になるってことは安く買えるってことか。でも、一体どれくらいお得なの？」

B「軽油引取税は1リットルあたり32・1円と決まっているみたいだ。最近の軽油価格は1リットルあたり150円位だな。例えば、これを年間に5万リットル使うとしよう。普通に購入すると750万円かかるけど、これを免税軽油にすると、32・1円×5万リットル＝約160万円の軽油引取税が免除されるから支払う金額は約590万円だ。もとの金額からだいたい2割引きくらいになるぞ。」

A「そうか！じゃあ軽油が1リットル100円になると3割ぐらい免除になるってことだ。でも、免税軽油を使うにはどうしたらいいんだ？」

B「近くの呉税事務所に申請して免税対象者として認められれば免税軽油の使用を証っていうのが交付

されるみたいだ。それと、免税証っていうチケットみたいなものを交付してもらって、免税軽油を買う時に給油所に渡すらしい。そういえば、免税軽油を使った報告書も出すって言ってたな。」

A「やる事がいろいろあって、なんかよく分からなくなってきたな。」

B「ノースジャパンに聞いてみるといいよ。こういう話なら経営企画課だな。」

A「よし、早速電話だ！」

林業・木材産業での活用率が低く、免税軽油が使えなくなってしまうかもしれませんので、まだ活用していない方はぜひご利用ください。

耳からウロコ

番外編

常陸国にあるむつ市の関係は？

―三陸が、陸前・陸中・陸後で

ないのは何故？―

日本の律令時代から続く地名は、

いまだに馴染みが深く、様々なところで、利用されている。「越中富山の薬売り」、「尾張名古屋は城でもつ」、「出雲大社」等様々である。林業界にも「紀州備長炭」、「土佐備長炭」、「日向備長炭」と呼ばれる地名入り商標がある。この地名は、現在の都道府県名がすぐ浮かんでくる優れものである。富山、愛知、島根、和歌山、高知、宮崎となる。ところが、陸前が宮城、陸中が岩手、羽前が山形、羽後が秋田となると、なかなか連想しづらい。何故なんだろうか？

律令時代に、東山道の終点の常陸国は、常陸国と陸奥国に分割される。この時、同様に筑紫国も筑前国、筑後国。火国も肥前国、肥後国となり、北陸道は、その後、終点の越後国から出羽国が分割される。なるほど、東北地方は、太平洋側は、すべて陸奥国だったのである。

じゃあ、いつ陸奥国は分割されたの？ それは戊辰戦争である。

この時、明治政府が奥羽越列藩同盟の藩を処分するため5分割したのである。磐城（浜通り）、岩代（中通

り、会津)、陸前(宮城)、陸中(岩手)、陸奥(青森)の5分割である。

三陸は、備前、備中、備後と同じにしようとも考えたが、陸奥の「奥」の意味は「後」と同じとして、陸奥をそのまま採用したという。出羽は(羽前と羽後)に分割された。

廃藩置県が行われたのは明治4年であり、この地名の公式な使用期間は僅か4年のワンタームであった。なるほど!ご当地でも何となく馴染みが薄いの、地名の有効期間が短かったためかなあである。

この時、「りくぜんの国」「りくちゅうの国」と同じく陸奥国は「りくおうの国」と音読みが定められたが、昔の名前「むつの国」の認知度に負け、「りくおうの国」は普及しなかったといわれている。

そう考えると、広大な地名である「陸奥市」ではなく、「むつ市」としたのかもしれないなあ。青森県むつ市は、律令時代の地名で考えると常陸国陸奥市で「茨城県むつ市?」となってもいいが、妄想しすぎかなあ。

ちよつと気になる木の話

70

国産材利用時代に向けての今 —日本の林業の歴史を 振り返る—

今回は、国産材利用時代に向けて取組んでいる現在を考える上で、今から9年前に書いた文章を再掲載してみたい。日本が輸入木材の比率が高かった時代、海外からみれば自国の石油資源を温存して、海外から輸入するアメリカの石油戦略と同じ視線で、国内の森林資源を温存しながら、海外から大量に木材を輸入するという日本の木材戦略と見られていたのである。植林に励んだ戦後の日本人の先輩に感謝し、再造林への誓いを強く認識する必要がある。思いを共有したい今である。

【木の文化の国日本と薪炭産業】

海外からの日本に来る視察者の最初の感想は、「飛行機の窓からみる風景は緑だらけで本当に緑の列島である」「日本のどの地方にいても水田の緑と周りの木の緑で一杯である」

と言う。「その上で、それなのに何故、海外からこんなに木材を輸入しているのか?自国の緑を温存するためか?」と聞かれる。また、喫茶店では、すぐにコップに水が出てくる。しかし、海外から来た人は飲まない。水は料金がかかると思っている。飲める水をタダで出す国はない。日本には水というメニューはお品書きには無い。それだけ、緑の森林に育まれた水の豊かな国は無いのである。現代日本人にとって、水と空気と緑はタダだと感じている。

しかしながら、古くからそうだったのだろうか。古い日本の浮世絵や絵図にはハゲ山が多く描かれている。京都の都では燃料用に松の根すら掘るのも禁止した程である。自国の資材が無い時代、建築をはじめ日用品からエネルギーに至るまで、主たる資材は木材だったのである。現存する城や社寺仏閣をみても木造だが、その材料は木のみである。現存しない城や社寺仏閣に使われたその量は

大変な量である。当局も関わっているものとして今年は式年遷宮があったし、名古屋城の本丸御殿の復元も行われているが、その材料を供給している木曾地域であっても、戦国時代には「尽山」となり、宝永5年(1708年)には、後に「木一本首一本」と言われるヒノキ、サワラ、コウヤマキ等の留木が行われることになっている。島崎藤村の「夜明け前」もここから始まっている。

第2次世界大戦の後も、山が荒廃し災害が頻発しており、全国植樹祭の始まりもここにある。「国破れて山河あり」とよく言うが、「国破れて(緑豊かな)山河なし」だったのである。その後の国民一体となった植林活動や治山事業によって、現在の緑の列島は完成し、しばらく日本の歴史上になかった緑豊かな山の姿になっている。

鈴木信哉「木の文化の国日本と薪炭産業」(株建設物価サービスマス月刊 会計検査資料2013年11月号)より

令和4年4月分の販売実績

樹種	合板・LVL用			製材・集成材・その他用			計		
	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)	当月出荷量 (m ³)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	16,282	81.5	157.3	10,100	90.3	101.1	26,382	84.7	129.7
カラマツ	3,128	102.4	201.1	1,992	264.2	135.8	5,119	134.4	169.4
アカマツ	3,910	88.4	135.7	127	74.1	12.6	4,037	87.9	103.7
その他	0	*	*	279	71.5	59.9	279	71.5	59.9
合計	23,319	84.9	157.7	12,498	100.0	96.6	35,817	89.7	129.2

樹種	燃料用		
	当月出荷量 (t)	前月比 (%)	前年同月比 (%)
スギ	3,258	75.1	95.3
カラマツ	2,634	81.3	93.1
アカマツ	2,581	130.4	122.9
その他	70	48.6	12.5
合計	8,544	88.1	95.9

樹種	今年度累計			
	合板・LVL用 (m ³)	製材・集成材・その他用 (m ³)	計 (m ³)	燃料用 (t)
スギ	16,282	10,100	26,382	3,258
カラマツ	3,128	1,992	5,119	2,634
アカマツ	3,910	127	4,037	2,581
その他	0	279	279	70
合計	23,319	12,498	35,817	8,544
目標達成率 (%)	9.7	7.1	8.6	6.3
計画量	240,000	175,000	415,000	135,000

注) *印は前月又は前年同月実績がなかったことを示す。

【令和4年4月の需給動向】

- スギは国有林越材の出材も加わり一時的に供給過剰な状況となっている。
- カラマツは合板工場に続き、集成材工場の引き合いも強まり原木不足状況が続く。
- アカマツは青変菌が入りやすい時期のため、過剰在庫対策として受入制限もある。

耳からウロコ

都道府県の木の当然性・意外性
— サクラランボ? —

フェニックス? —

都道府県の花・鳥と並んで、都道府県の木がよく紹介されている。いつ定められたんだらうか? 都道府県の木は、1970年の日本万国博覧会にあわせて、某大手新聞社が「緑のニッポン全国運動」で公募して1966年に定められたとされる。

その中では、北海道はエゾマツ、青森はヒバ、岩手は南部アカマツとなるほど。そうだよね〜となる。スギも多く、秋田は秋田スギ、富山は立山スギ、三重は神宮スギ、京都は北山スギ、奈良はスギ、高知はヤナセ杉とストレットに理解ができる。

アカマツも岩手の他に、岡山、山口、クロマツは鳥取、群馬、マツでは愛媛、福井、沖縄もリュウキュウマツと数が多い。大都市圏である東京、神奈川、大阪は、揃ってイチヨウとなり、山の木ではなく街の並木かな〜となる。

でも、ヒノキが見当たらない。苗字と同じで、松、杉と比べて桧は、火の木と思われて、避けられているのかな〜? よく見てみると長崎1県が指定している。

林業公社のはしりの対馬のヒノキ植林の流れかも…。和歌山のウバメガシは紀州備長炭、岐阜のイチイは飛騨の伝統工芸品、長野の白樺は観光資源か〜そこそこ理解できる。

そこで、「えっ?」と思えるのが「サクラランボ」である。当然! 山形県だよ。果樹だけれども木は木である。同様なのは香川県のオリーブも果樹であるが、それなりに理解ができる。そういえば、長野県特産物として、オリーブやツバキが植えられた事がある。油の利用目的のため果物ではないとの理屈であった。

最後は、宮崎県の「フェニックス」である。観光資源としては、わからないでもないが、森林・林業大県としては、ちょっととなる。しかし、流石に、2003年は、ヤマザクラとオビ杉を追加している。そうだよね! 他の森林・林業大県でも、一度都道府県の木を再検証して再考してみるのは、良いタイミングかもしれない。森林・林業大県的には、大分はブンゴウメ、静岡はモクセイ、兵庫・熊本・鹿児島クスノキ、徳島ヤマモミジである。信州カラマツ、尾鷲ヒノキ、天竜スギ等の有名地域ブランドがないのも気にかかる。加えて、ブナやミズナラ、カシ等の広葉樹の名前も見つからない。(追記、栃木のトチノキは別の意味で超〜バッチシ!)